

牧師室から (2022.6.19)

先日、小惑星探査機はやぶさ 2 が小惑星リュウグウから持ち帰った砂や石から、アミノ酸や水が検出されたというニュースを見聞した。地球の生命体の起源については、未だ謎であり興味深い問題であるが、この調査結果により、地球の生命体の芽胞が宇宙から飛来したのではないかという仮説が幾分顧みられるようになった。またこのニュースに続いて、NASAがUFOの検証に真剣に取り組むようになったとの報道があった。

私が子どもの頃は、直立した蛸のような火星などをまともに信じる人は少なかったと思う。しかし既に火星からも川のようなものの跡が確認されており、かつて何かしらの生命体が存在していたという考えも荒唐無稽ではなくなっている。地球外生命体との遭遇も既にSFの世界ではなくなってきているようである。

宇宙の創造者なる神さまの造られた数えきれないほどの星の中のどれかに、地球のような、あるいは全く想像もつかないような生命体があったなら、是非遭ってみたいものである。

そして、神の国のような平和と喜びの共同体として、共に生きることができればと願う。

「狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛もひとしく干し、草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の巣に手を入れる。わたしの聖なる山においては、何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように、大地は主を知る知識で満たされる。その日が来れば、エッサイの根は、すべての民の旗印として立てられ、国々はそれを求めて集う。そのとどまるところは栄光に輝く。」

(イザヤ書 11:6~10)

(鈴木淳一牧師)